

英国建築都市環境委員会 (CABE) の デザインレビュー制度

高松誠治¹・福井恒明²

¹ 正会員 スペースシンタックス・ジャパン株式会社

(〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-4-3F, E-mail: s.takamatsu@spacesyntax-japan.com)

² 正会員 博士 (工) 国土交通省国土技術政策総合研究所 環境研究部緑化生態研究室

(〒305-0804 茨城県つくば市旭1, E-mail: fukui-t92ta@nilim.go.jp)

本稿では、景観デザイン誘導・調整手法としての英国建築都市環境委員会 (CABE) のデザインレビューの取組みを紹介する。1999年の設立以降、その存在感を増している CABE は、研究、出版等さまざまな活動を通じて建築・都市環境デザインの質の向上を図ろうとしている。その中でも中心的な活動であるデザインレビューに焦点を当て、筆者の実体験も踏まえて、その活動が好調である要因を考察する。

キーワード: デザイン政策、デザインレビュー、CABE、英国

1. はじめに

美しい街並みをつくろう、賑わいのある商店街をつくろう、わかりやすく機能的な駅前広場をつくろう…。私達のこれらの意志は、詰まるところ「良いデザインによって人々の暮らしや気持ちを豊かにしよう」ということになるだろう。近年は専門家ならずとも、公共空間デザインについての意識が高まりつつある。

しかし、どのようなものが「良いデザイン」なのか、またそれをどういう方法で評価し、国全体の公共空間デザインの質を上げていけばよいかについては、なお多くの議論がなされている。

欧州の街と日本の街では、歴史的な街並みの保存の状態、地震等の気象条件の違いなど、根本的な違いが存在する。しかしながら、人々の都市環境に対する意識を高めること、デザインの良否について実のある議論ができる素地をつくること、異なる専門家が互いの意見を尊重しあい協働することなど、良いデザインを生み出すための状況を整えることについては、欧州に学ぶべきところが多くあると思われる。

本稿では、景観デザイン誘導・調整手法としての、英国建築都市環境委員会 (CABE) のデザインレビューの取組みを紹介したい。まず、組織としての CABE の概要、さらにその中心的な活動としてのデザインレビューについて整理する。次に、デザインレビューにおけるプレゼンテーションはどのようになされているかの情報について、筆者の実経験から可能な範囲で具体的な内容や雰囲気を含めて紹介したい。最後に、CABE の活動がうまく機能している要因について考察することとする。

2. 英国建築都市環境委員会 (CABE) の活動概要

(1) 沿革

CABE は、都市プロジェクトに関する助言を行う政府の行政機関である。1999年にDCMS (文化・スポーツ・メディア省) により設立されて以来、英国内の建築物や公共空間のデザインの質を高めるための活動を行っている。当時の都市計画の責任省庁はDTLR (交通・地方政府・地域省) であり、DCMS とともに CABE の活動を支えてきたが、DTLR は 2001年5月に DETR (環境・交通・地域省) に、2002年6月に ODPM (副首相府) に、2006年5月に DCLG (地域社会・地方自治省) へと組織替えをして今日に至る。

CABE は、設立当初から、非法定の行政機関であったが、2006年1月に法定行政機関となった (ただしデザインレビュー等のアドバイス、声明に法的拘束力はない)。現在、CABE の運営は DCLG と DCMS の資金により行われており、例えば 2006年度の場合、DCLG から £6,400,000 (約16億円)、DCMS から £3,691,000 (約9億円) がそれぞれ支出されており、これは CABE の総収入のうちの 88% を占める (12% は活動収益等)。

諮問機関的な存在であるとはいえ、関連各分野の第一線で活躍する 16 人の Commissioner (理事) のほかに約 100 名の専属スタッフを抱える。理事は、Ken Shuttleworth (ノーマンフォスター事務所のナンバー 2 を長く勤めた後に独立し、現在も多くのプロジェクトの建築設計に携わる) 等、第一線の実務家、研究者で構成されており、専属スタッフも設計事務所や地方自治体に勤務経験のある技術者等である。

CABE は、具体的なプロジェクトに細部にわたり関与することもあることから、都市・建築関係の公共の機関

の中でその活動は非常に顕著である。そのオフィスはロンドンの中心部にあり、若い専門スタッフがきびきびと行き来し、また、ファッションナブルな女性の幹部職員が多いことも目に付く。クリエイティブな雰囲気が漂っている。

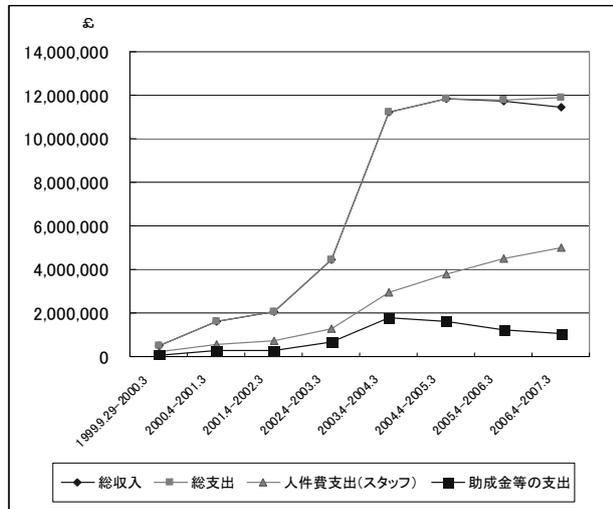


表-1 CABAの収支の推移 (CABA annual report 1999から2007³⁾のデータから筆者が作成)

(2) 活動実績

CABAの活動は以下のような多岐にわたるものである。

- a) Design Review (設計案の評価)

本稿で取り上げている活動。
- b) Enabling (助言)

地方自治体等の公的機関に対して、CABAスタッフや任命した外部専門家による無償の助言サービスを行っている。
- c) Research (研究事業)

商業、教育、医療、住宅、レジャー施設、公共の建築物、オープンスペース等の機能ごとの建築物・空間のデザイン方針について、また、都市計画、地域社会の持続可能性など、幅広いテーマの研究活動を行っている。
- d) Campaigns (社会的運動)

質の高い事業の実践を促すためのキャンペーン、優良な事業に対する表彰や、特定の事業に対して資金の援助を行っている。
- e) Education (教育)

地方自治体のプランナーや地方議員、ディベロッパー等の事業の主体となる人々や、建築家などの専門家、また一般市民や小中学生等に対するものも含め、幅広い教育プログラムを展開している。
- f) Publications (出版)

専属のスタッフによる研究、および大学や民間の

研究機関とタイアップした研究の成果が反映されており、また、平易な文章、明快で美しい紙面デザインが心掛けられている。

CABAのChair (会長) であるJohn Sorrellは、CABAが究極的に目指すものについて次のように述べている²⁾。

「建築・都市環境は、人々の生活の質に最も大きい影響を与える要素であると言われています。(中略)例えば、来年この国に生まれてくる70万人の子供達は、今デザインされている病院、学校、公園や公共空間の中で一生をおくります。彼らの人生を少しでも豊かにすることに繋がるとすれば、私達の活動もいづらか意味があるのではないのでしょうか。」

以上のように積極的な活動を続けるCABAは、「空間デザインの質を重視する」という新しい都市計画システム³⁾の方向性とも合致しており、その成果を上げ始めているようである。また、CABAによる声明は、新聞などのメディアに取り上げられることも多く、一般市民への露出度も高い。

3. デザインレビュー制度

(1) 対象となるプロジェクト

CABAの活動の中で、任命した委員による設計・計画案の評価、助言は、デザイン・レビュー (Design Review) とよばれ、CABAの活動の中で最も重要なものの一つとなっている⁵⁾。これは、地域にとって「重要なプロジェクト」に対して、その計画・設計案をCABAのデザインレビュー委員会 (Design Review Panel) が第三者として評価し、改善のための助言を行うというものである。

このデザインレビューの対象となるプロジェクトの選考基準は、以下の通りである。まず、レビューの候補は、CABA内部の各地域担当のスタッフから声上がる場合、あるいは地方自治体によって持ち込まれる場合などがある。レビューの対象として選ばれる基準については以下の3点が挙げられている。

- ・規模や内在する機能の点で重要であるもの
- ・立地の特性から重要であるもの
- ・規模、機能、立地を超えた重要性を示唆するもの

ただし、明確な数値的基準があるわけではなく、上記のように、地域の状況等を勘案しながら決めるということである。プロジェクトの段階については、構想段階から、基本設計を行って開発許可申請をする前という段階まで、様々である。

レビューの対象となるプロジェクト数は、年々増え続けており、設立初年度は80件程度だったものが、2006年度には年間1,114件に達している。このうち、401件が下に述べる、正式なレビューのプロセスを受けており、残りのプロジェクトについては、CABA内の担当スタッフの発表に対して他のスタッフがコメントする「インター

ナル・レビュー」や、ミーティング形式で図面等を照査する「デスクトップ・レビュー」等により対応を行っている。また、同様のデザインレビュー委員会を各地方でも組織できるよう、冊子等による指導を行っている⁶⁾。

(2) デザインレビュー委員の任命と召集

デザインレビューでは、あらかじめCABEによって任命された30名程の各分野の専門家の中から、プロジェクトの性格にあわせて数名が招集される。委員の専門領域としては、建築、都市計画、アーバンデザイン、ランドスケープデザイン、歴史、サステナビリティ、インクルーシブ（公平な）デザイン、土木・構造、交通、パブリックアート、開発事業等があり、これらの十分な実務経験のある専門家から委員を任命している。

CABEでは、上述のような研究や出版活動を通じて、「良いデザイン」の意味を示しているが、これらの考え方を全ての委員が理解し、また同時に互いの専門領域、専門的視点について敬意を払って、レビューを行うこととされている。このことにより、デザインレビューにおいて委員個人の趣味ではなく、専門的、分析的な視点から、できる限り客観的な事実に基づいたコメントを出すことを目指している。質の高いアドバイスを確実に提供するため、活動を始める前に、模擬的なレビューを予行演習として行うこと等の試みがなされている。

(3) デザインレビューの手順

a) 準備

あるプロジェクトがデザインレビューの候補に挙げると、まず、CABEスタッフにより、現地調査、事業主体等への聴取が実施され、プロジェクトを取り巻く状況の把握が行われる。その後、CABE内部の会議を経てレビューの実施が決まれば、日程の調整が行われるとともに、CABEスタッフから発表者への情報提供（発表資料の準備、進行の仕方について等）が行われる。これらは、より効果的なレビューを行うために必須と考えられている。

発表資料は、文書よりも図面、配布資料よりも大判のプリントアウトが好ましいとされている。また、表象的なイメージだけでなく、施設・空間の実際の機能や敷地と周辺との関係、将来の利用者の体験等についても、分析、提示することとされている。

CABEのデザインレビューでは、文章やキャッチコピーのようなものはほとんど見られない。また、数ページにもわたる配布資料のようなものは一切ない。ビジュアルに示した大判パネルと模型。これが基本となっている。

b) プレゼンテーション

デザインレビュー当日は、各プロジェクトに1時間が割り当てられる。参加するメンバーは、地方自治体の担当者やディベロッパー等の事業主体、建築家やマスタープランナー等のデザイン責任者、レビュー委員6～8名程度、CABEスタッフ若干名、さらに歴史的建造物に関係

する場合はイングリッシュ・ヘリテージ（歴史的建造物や景観の保全を管轄する機関）から1名が召集される。

まず、事業主体がプロジェクト全体に関するイントロダクション（2～3分）を行った後、デザイン責任者がプロジェクト概要、敷地の特性、そしてデザイン案についての説明を行う。ここでは、どんなに大規模なプロジェクトでも、プレゼンテーション時間は15分と決められている。これは、複雑な事象ほど明快に説明されるべき、という考え方に基づいている。このプレゼンテーションでは、様式や意匠に関するコンセプト等よりも、創出される空間がどのような人にどのように使われるかを考え、説明することが求められる。



図-1 レビューの様子（CABEによる紹介ビデオ²⁾より）

c) 委員によるコメント

プレゼンテーションが終わると、まず各委員が一人ずつ全体的な印象や気になる点について述べる。このあたりの各人のコメントについては非公開となっており、かなり率直な意見が出される。その後、意見が述べられたポイントについてディスカッションを行う。多くの委員が同じような意見の場合もあるし、当然、意見が分かれることもある。ここでは、どちらが正しいかということではなく、互いの意見を尊重しながら問題をより明確にするような議論が目指されている。

最後に、議論の結果を踏まえ、Chair（議長）により総括のコメントが出される。この総括をベースにCABE名義の1通の意見書が作成される。この意見書は、レビュー委員の総意として事業主・デザインチームに送られる。また、原則として（民間事業者の利益を損ねることなど不適切な場合を除き）、CABEウェブサイトにも公開される。

つまり、率直で実地的な議論ができるよう、ディスカッション自体は非公開、総括コメントはCABEの総意ということで公開、というふうメリハリをつけている。

意見書によるアドバイスは、具体的かつ実行可能なものでなければならないとされている。特に不支持を表明するデザイン案については、どこが、どのように問題であるかを明確に示し、改善または再検討を行うとされている。

d) レビュー後の対応

デザインレビューを受けたプロジェクトのうち、特に、案が支持されなかったものについては、必要に応じて、CABEスタッフが意見書の意味を解説し、事業主体と今後の対応を議論するためのミーティングの場が持たれる。さらに、デザイン案が更新された後に、再度レビューを受ける機会を提供することも多々ある。

CABEのコメントは、特に、大きな注目を集めているプロジェクトについては、新聞等のメディアに取り上げられることもあるため、事業主体としても無視することは事実上難しい。CABEによって強く反対された案は、地域住民の参加による公聴会でも反対され、開発許可が下りないという結果になる可能性が高いからである。

(3) デザインレビューの実効性

上記のように、事業主体、デザイン担当者は、CABEによる意見書に対して、なんらかの対応を行う必要がある。たとえば、ある橋梁の建設プロジェクトでは、デザ

インレビューの後にデザイン案に対する批判が強まり、結果として抜本的な見直しが必要な状況に至った。これにより設計案を白紙に戻し、新たな橋のデザインに向けたコンペ開催が開催されることになった。

また別のプロジェクトでは、CABEの意見書を受け、デザインチームはマスタープランの修正、新たなデザインコードの策定等を行った後、約8カ月後に再度レビューを受けている。変更点についての詳しい情報は公開されていないが、公開されている2回目の意見書から、いくつかの新たな改善点が見られたことがわかる。

このように、デザインレビューの取組みについては、少なからず実効性が確認されている。今後、レビューを受けたプロジェクトの多くが順次、竣工することから、CABEとしてもレビューの実効性について詳しく検証することが計画されている。

4. 事例紹介～デザインチームの視点から～

ここでは、筆者（高松）が、実際にデザインレビューを受ける側のチームメンバーとして経験したことを基に述べる。

(1) St Botolph's Quarter プロジェクト

まず、ColchesterのSt Botolph's Quarterプロジェクトについて紹介する。Colchesterは、英国最古の街と言われ、ローマ時代の城郭都市の構造を今に伝える歴史的な街である。旧城郭付近は、現在も人口10万人ほど

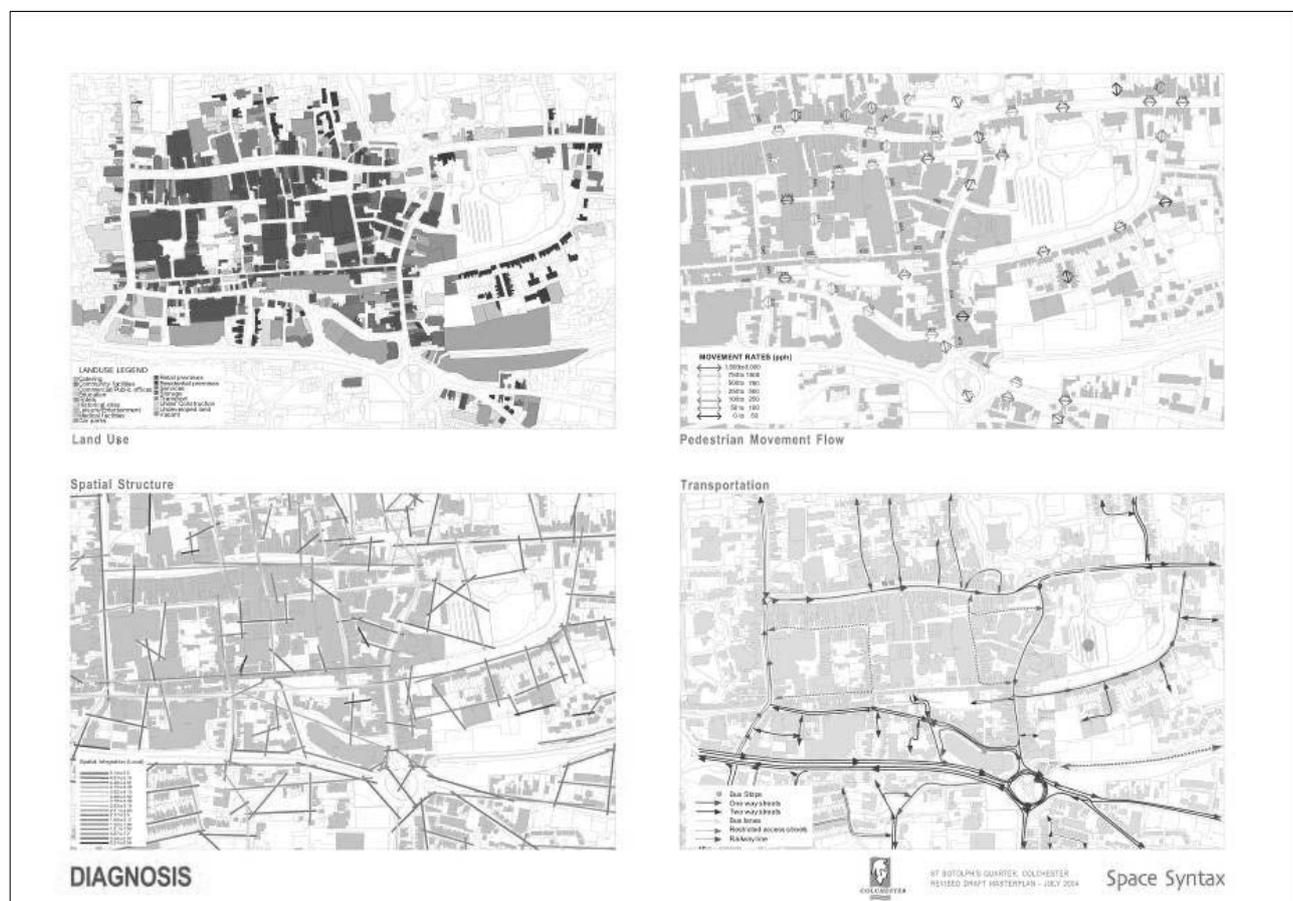


図-2 プレゼンテーションパネル（一部）

の市の中心市街地を形成している。St Botolph's Quarterは、中心市街地の東側部分、歴史的地区であるものの、人通りが少なく寂れた地区となっている。無骨なバスターミナルや駐車場の奥にひっそりと佇む歴史的な遺構は、観光客にもなかなか気付かれないという状況となっている。この状況を改善し、また手狭になった商業地区を若干拡大しつつ、地域の文化拠点施設を新設するというプロジェクトが計画された⁷⁾。

構想段階の案を経て、より具体的な公共空間整備と施設配置を計画するため、プロポーザル方式によりマスタープランナー (Space Syntax Limited) が選ばれた。既に東西に長いハイストリート (商店街) をさらに東に延伸するというのが当初の案であったが、マスタープラン検討により商店街を南側に延伸し、こちらにバスターミナルを移転、東側は文化施設と住宅を新設するという案が示された。この案がデザインレビューに掛けられたわけであるが、そのプレゼンテーションには、現況分析から得られた事実を視覚的に表現したパネルが用意された。内容はそれぞれ、敷地コンテクスト、ローマ時代の城郭の位置と現在の街区形状、詳細な土地利用分布、歩行者量の分布、各種交通動線、街路網の幾何構造 (繋がりがた)、バス停と商店街のアクセス等の分析である。さらにマスタープラン案について、2次元および3次元でのプレゼンテーション、地元での公聴会の様子等、全ての情報がA1サイズのパネルに視覚的に示された (図-2)⁸⁾。

レビューの結果、全体的なマスタープランの方向性が支持され、具体的な点についてアドバイスがなされた。その後、文化施設 (Visual Art Facility) の設計者としてラファエル・ピニョーリが選ばれ、また、個々の施設や街路の設計についても、マスタープランナーも交えてデザイン検討が続いている。

(2) Stephenson Quarter プロジェクト

Newcastleは、イングランド北東部の中心都市である。近年、ノーマンフォスター設計の文化施設 Sage Gatesheadや、ランドマークとなっているミレニアムブリッジ等、タイン川沿いの開発に注目が集まっている。Stephenson Quarterは、このタイン川を見下ろす斜面にあり、Newcastle 中央駅 (出入口は北口のみ) のすぐ南側に位置する。Stephensonとは「蒸気機関車の父」と呼称されるスティーブンスンのことであり、ここで蒸気機関車の開発、製造が行われたのである。現在も、その工場の建物の一部が保存されているが、他は倉庫や駐車場が広がっており、立地条件を生かしきれていないということから開発への期待が高まっていた。

街の街路構造、歩行者の分布、地形、周囲の建築物の様式や規模、歴史的背景等が検討され、それを基に、数棟のオフィスビル、インキュベーション (ベンチャー企業等の) 施設、飲食施設、ブティック・ホテル (最近流行の中高級のデザイン・ホテル)、共同住宅等が計画

され、これらと駅を結ぶ駅南口の新設も提案された。

実は、デザインチームを統括していた建築家は、当初、建築様式やディテールについてプレゼンテーションを展開したがっていたが、CABEスタッフの事前説明や、マスタープランナーのアドバイスにより、ボリューム配分や機能配置、公共空間の性格づけ、歩行者の動線等の説明を中心に行った。

この日、召集された委員会は、建築設計の実務家3名のほか、歴史的地域計画、住宅開発、歴史遺産、ランドスケープの各専門家、さらにアート・キュレーターの委員で構成された。

委員による質疑では、集合住宅の住戸数と各棟の高さ、提案された3つの広場それぞれの性格付け、ランドスケープデザインの方向性等が議論になった。具体的なポイントとしては、駅の南口の新設については全員により支持、全体の街区割についても、論理的な検討分析のプロセスを含めて評価された。また、集合住宅については、より多くの住戸を供給し密度を高めることがアドバイスされた。一方で、地区の中心となるような場所と、それに面する質の高い公共建築物の必要性が期待されるとし、具体化の過程で再度レビューを受けることが勧められた。

このようなコメントがCABEから出されることにより、ディベロッパーや自治体にとって、駅南口の新設や大規模な住宅の開発という方向性の正しさを確認でき、関係者との調整や地域のコンセンサスを得るための活動にとりくみやすくなるといえる。

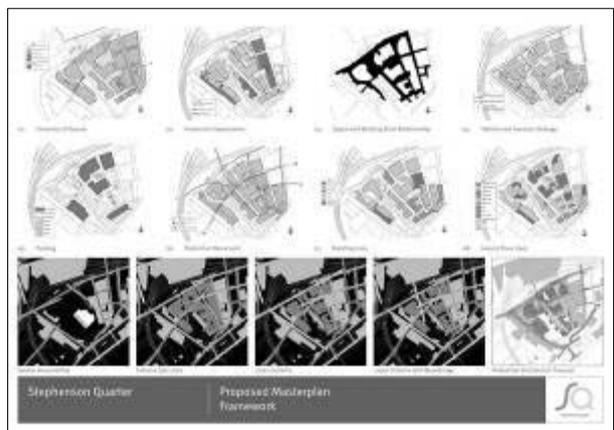


図-3 プレゼンテーションパネル (一部)

5. まとめ

最後に、CABEによるデザインレビューが有効に機能している要因についてまとめてみたい。

まず1点目に挙げられることは、レビューの取組みがCABEによる他の種々の活動と繋がっているという点である。研究活動のなかからアーバンデザインや公共空間

の質を高めることの重要性を実例を挙げて証明し、これらの研究成果を国の政策に反映させると共に、教育・広報活動の素材としても活用する。また、それらの出版物等を通して、デザインに関するポキャブラリーを広め、共有することにより、都市空間の質に関する議論がしやすくなり、実務家の実力も向上する。さらに研究活動やデザイン・レビューの活発な取組みを広報することは、一般市民の意識を高めるとともに、CABE自体の存在感、信頼性をも高める。このように、レビューによる議論をしやすくし、また、その一般的な評価も高めているのである。

2点目の要因として、デザインレビュー委員の質が確保されているということが挙げられる。現役で活躍する建築家、デザイナー、プランナーほか、各分野の専門家を採用している。大規模なプロジェクトでは、多くの専門家によるデザインチームによって検討がすすめられるとはいえ、全ての専門的視点が網羅されることは難しく、その点からも第一線の実務家のアドバイスは有益である。また、デザインレビューの委員は、逆にレビューを受ける側においてもおかしくないような現役の実務家であり、非常に現実的で専門的な意見を引き出すことができる。レビューを受ける建築家等にとっては、他者の率直な意見を聞く貴重な場を提供しているわけであり、実務家にとっての研鑽の場にもなっていると思われる。

3点目として、委員だけによる組織ではなく多くの常勤スタッフによって運営されているということである。多忙な委員のスケジュール調整だけでもたいへんな労力が必要だが、短時間で意味のあるレビューを開催するための下準備には、専門知識を持って積極的に取り組むスタッフの存在が欠かせない。また、上述のように相互に繋がった活動という意味でも、研究活動やイベント、キャンペーン等の幅広い活動を主導する人材が必要である。さらに、活動をわかりやすく伝えるためのアウトプットの部分、つまり、広報活動や出版等にもそれなりの労力と資金を掛けることが必須であろう。

このように、現在のところCABEによるデザインレビューは、うまく機能しているように見受けられる。この成果として、実際に質の高い都市空間が創出されるのか、また地方版のデザインレビューの展開など、今後の動向にさらに注目したい。

参考文献

- 1) CABE web (www.CABE.org.uk)
- 2) CABE - A guide to design review (video), CABE
- 3) CABE annual report and accounts, 1999-2007, CABE
- 4) イギリスの景観施策に関する調査業務報告書, 国土交通省国土技術政策総合研究所, 2006. 3
- 5) 英国建築都市環境委員会の活動状況に関する調査業務報告書, 国土交通省国土技術政策総合研究所, 2007. 2
- 6) How to do design review - Creating and running a successful panel, CABE, 2006
- 7) Newsnight (テレビ番組), BBC, 2005. 01. 21
- 8) Space Syntax Limited web (www.spacesyntax.com)